

2.3 外湯文化の再生

（1）道後温泉本館周辺・道後温泉駅周辺整備

1）道後温泉駅周辺整備の経緯

「道後温泉本館周辺景観整備計画」(1998)により、道後温泉本館周辺の道路の拡幅やバイパス整備等の動線整備の基本計画が示された。その後、『『坂の上の雲』を軸とした21世紀のまちづくり基本計画』(2001)で、道後地区はサブセンターゾーンに位置付けられ、『坂の上の雲』に関連する史跡や施設等をめぐる回廊型の動線の確立を目指した。

NHK スペシャルドラマ『坂の上の雲』（2009-2011）の放映により、観光客の増加が見込まれる中、放映時期に合わせた整備を県・市が連携して進めた。

道後温泉整備に至る経緯

1992（平成4）	道後温泉誇れるまちづくり推進協議会 発足
1997（平成9）	道後温泉本館周辺景観整備計画策定検討委員会 設置
1998（平成10）	道後温泉本館周辺景観整備計画
1999（平成11）	中心市街地活性化基本計画
2000（平成12）	歩いて暮らせる街づくり構想
2001（平成13）	『坂の上の雲』を軸とした21世紀のまちづくり基本計画
2004（平成16）	都市再生整備計画（旧まちづくり交付金事業） ～2009（平成21）年まで
2004（平成16）	交通等総合的まちづくり協議会 設置
2005（平成17）	松山市総合的まちづくり計画
2006（平成18）	道後温泉歴史漂う景観まちづくり宣言『道後百年の景』
2007（平成19）	道後温泉本館周辺整備（道路、東側広場等）完成
2009（平成21）	道後温泉地区ファサード整備 完成
2009（平成21）	道後温泉駅周辺整備 完成
2009（平成21）	NHK スペシャルドラマ『坂の上の雲』 ～2011（平成23）年まで
2010（平成22）	松山市景観計画

『道後温泉本館周辺景観整備計画』（平成10年6月）

- まちづくりのテーマ
貴重な文化遺産を守り生かしながら、新たな調和を作り出す
- まちづくりの基本方針
(1) メリハリのあるわかりやすい景観形成整備を図る
(2) 面的整備を図り、「地区」としてのイメージ統合を図る
(3) 既存資源を最大限生かす
(4) 素材重視・簡素なデザインによる、品格のある景観を目指す
(5) 快適な生活環境の形成を図る

2）県・市の連携事業

整備は、県道なら県、市道なら市というように、それぞれの道路管理者が行うのが通常である。この整備区間においては、道後公園から道後温泉駅前を経由し道後温泉本館の西側を通して北に抜ける道路は県道（六軒家石手線）であったが、駅前や本館の周辺については、市が市道部分の拡幅（バイパス整備）を行った後、この市道敷と県道敷を交換し、元の県道敷を市が広場等として整備した。

道後温泉駅や道後温泉本館の周辺など、道後温泉地区の象徴となる場所においては、質の高い空間や景観の演出が求められる、地元との綿密な調整や合意形成が必要になることから、市が主体的に整備する役割分担となった。



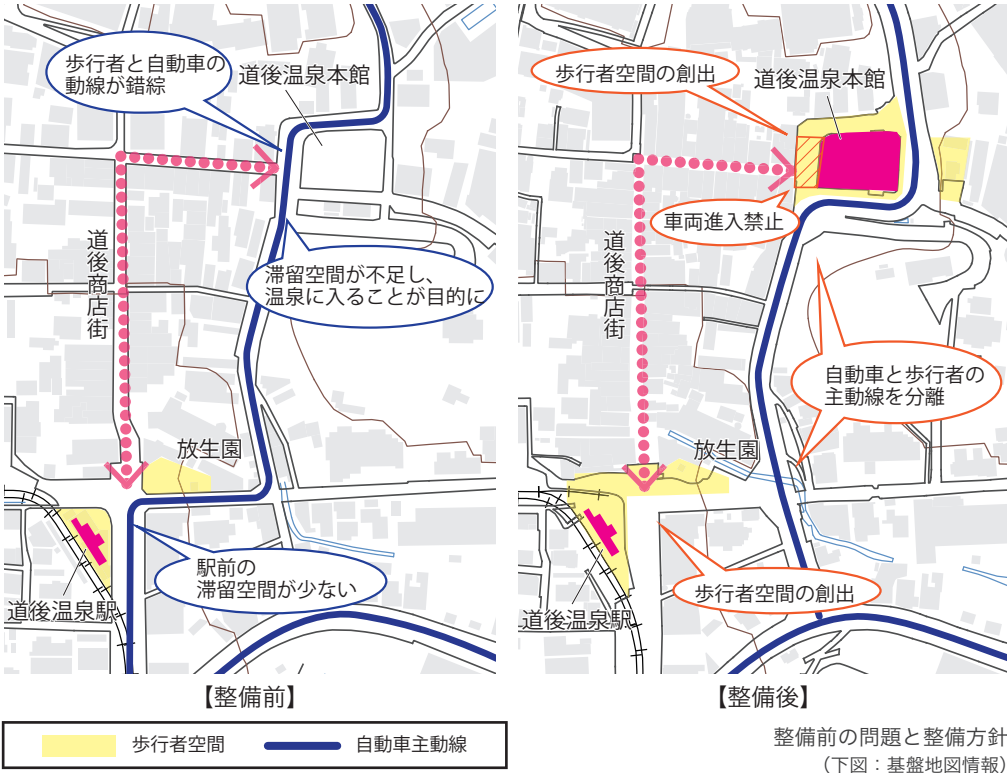
県・市の整備の分担
(下図：基盤地図情報)

3）自動車の主動線の変更と歩行者空間の拡大

整備前の道後温泉駅前には、歩行者空間が乏しく、車道へ溢れ出る歩行者と自動車動線の錯綜が問題となっていた。また、道後温泉本館前は、道後商店街から本館へ向かう歩行者動線が、自動車動線により分断され、歩行者が滞留できる空間もなかった。

整備にあたり、自動車動線にバイパスを設け、駅前への進入を抑制するとともに、道後温泉本館前の歩行者動線の分断を解消した。

さらに、もとの自動車空間は歩行者空間に転換するとともに、バイパス道路の用地を残置ごと買収し広場として整備することで、駅や本館周辺で歩行者の滞留空間が創出された。

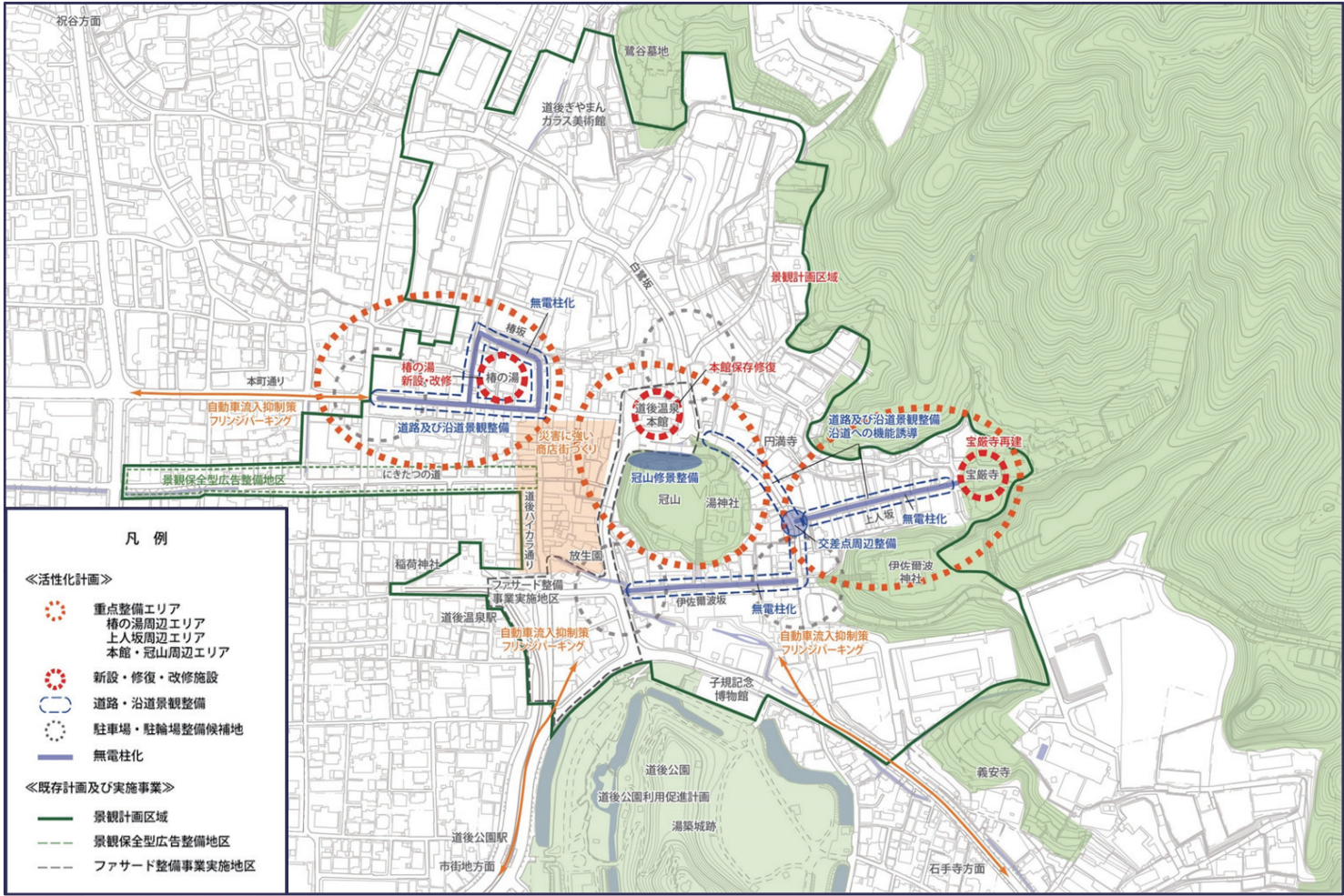


整備前の問題と整備方針
(下図：基盤地図情報)

【整備前】	【整備後】
本館西側（入口側） 	本館の入口前は対面1車線の車道であり、写真撮影はおろか、入浴客の入場の際に車との交錯等の危険性のある状態であった。 
本館北側 	旅館やホテルが多く立地する北側も車道であり、宿泊する観光客にとって、本館や商店街に向かう通路として危険であった。 
本館周辺（景観） 	整備前は、本館周囲の商業施設に目を向けられ、壁面広告や看板等が目立っていた。 
駅前 	通貨交通車両が道後温泉駅前に進入したため、歩行者にとって必ずしも安全な駅前ではなかった。 

写真提供：松山市

(2) 道後温泉本活性化計画



道後温泉活性化計画の全体図
(出典：道後温泉活性化計画)

1) 計画概要

道後温泉本館周辺・道後温泉駅周辺整備により、歩行者の回遊性が高まる中、かつて旅人やお遍路さんがそぞろ歩きをしていた外湯の文化の継承や発展を目指して、「第 3 の外湯」を求める気運が高まった。そこで、聖徳太子の来湯や斉明天皇の行幸などの物語・伝説をモチーフにした飛鳥時代の入浴スタイルを体験できる外湯施設の整備が着想され、椿の湯周辺は、「日本最古の湯」を再現した空間の創出と、「まちの湯」の継承をコンセプトに、外湯と中庭を設ける計画となった。また、火災により焼失した一遍上人の生誕地である宝厳寺の再建と参道の上人坂の再生、さらに、保存修復工事を行う道後温泉本館を臨む展望スポットの創出などが、道後温泉活性化計画として盛り込まれた。

飛鳥乃湯泉を整備する「椿の湯周辺エリア」と上人坂再生を目指す「上人坂周辺エリア」、保存修復工事を行う「本館・冠山周辺エリア」の 3 エリアが重点整備エリアとして位置づけられる。

道後温泉活性化計画策定に至る経緯

2012（平成 24）	松山市道後温泉活性化計画審議会 設立
2012（平成 24）	道後温泉活性化ワークショップ（～2015（平成 27）まで）
2013（平成 25）	道後温泉活性化懇談会
2013（平成 25）	道後上人坂再生整備協議会
2014（平成 26）	道後温泉活性化基本計画 策定
2014（平成 26）	U30 都市計画設計提案競技「移動風景の再生と展開」
2015（平成 27）	道後温泉活性化計画 策定
2017（平成 29）	道後温泉周辺地区景観まちづくりデザインガイドライン改訂（椿の湯周辺地区追加）
2017（平成 29）	道後温泉別館 飛鳥乃湯泉 オープン、道後温泉椿の湯リニューアルオープン
2018（平成 30）	椿通り景観整備基本構想 策定
2019（平成 31）	「空の散歩道」リニューアルオープン
2019（平成 31）	椿の湯周辺ファサード整備事業 完了

松山市道後温泉活性化計画審議会

道後温泉本館保存修復工事にあたり観光客や地域経済に与える影響を考慮し、総合的な対策等を講ずるため、有識者や地域の代表者等で設置、「道後温泉活性化計画」を答申

道後温泉活性化計画

①都市計画設計提案競技

30 歳以下の大学生や実務者から、道後温泉街をテーマに計画・設計の提案競技を実施

②道後温泉活性化懇談会

学識経験者、道後温泉旅館協同組合、道後商店街振興組合、道後温泉誇れるまちづくり推進協議会などの代表者に、活性化計画等の案について意見聴取

③道後温泉活性化ワークショップ

地域の関係者等が参加するワークショップの開催やアンケートを実施

④道後上人坂再生整備協議会

宝厳寺再建や上人坂再生等を目的に、関係団体、企業や学識経験者などで構成

道後温泉活性化計画策定の意見収集
(出典：道後温泉活性化計画をもとに作成)

2) 椿の湯周辺エリアの広場空間の創出

道後温泉本館周辺整備（2007）、飛鳥乃湯泉の新設（2017）ともに、整備にあたり、広場空間が大きく確保され、そぞろ歩きや滞在が楽しめる空間になっているが、本館は、三層楼の壮麗な建物を主役とするため、建物が広場を囲う設えとしたのに対し、聖徳太子の来湯や斉明天皇の行幸をモチーフにした飛鳥乃湯泉は、湯岡碑文やそこに描かれる椿の森を配す中庭を主役とし、建物が広場を囲う設えとしている。

3) 本館・冠山周辺エリア

〈展望スポット整備〉

空の散歩道をリニューアルして展望機能を強化するため、新たに足湯や東屋、ベンチ、更衣室、藤棚、庭を設置した。

〈冠山アクセス動線整備〉

冠山には、本館や温泉街の眺望スポットである「空の散歩道」のほか、湯神社などの歴史的資源があり、観光客等の回遊性を高めるため、歩車分離のアクセス動線を整備した。



空の散歩道
(出典：松山市ホームページ)

4) 上人坂周辺エリアの再生

上人坂周辺エリアについても、道後温泉活性化計画の中で、次のような整備が検討されている。

〈ゾーニング〉

坂下の賑わい空間から坂上の歴史を感じられる空間までの間のゾーンを意識し、文化施設、宿泊施設、飲食店等の機能をリズムよく配置する。

〈動線〉

上人坂をメインに交通的な利便性を踏まえつつ、景観に配慮した整備を進め、上人坂と両脇の裏道についても歩行者散策エリアとして可能性を検討する。

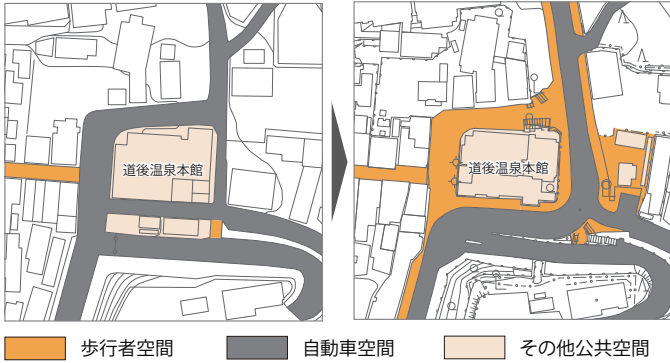
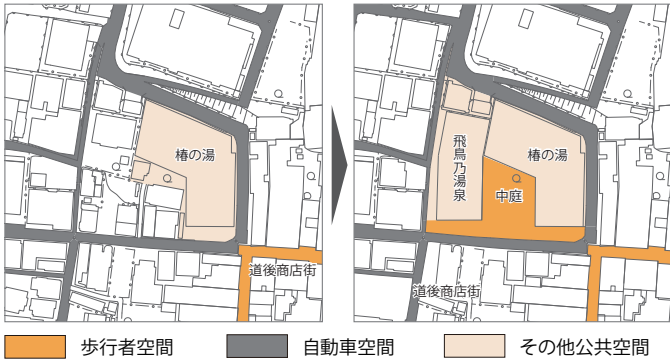
〈ファサード〉

木質バルコニーが張り出した 2 層の建物群が連なる松ヶ枝町時代の上人坂の景観を参考にしながら、温泉街における表参道として相応しい景観形成を目指す。

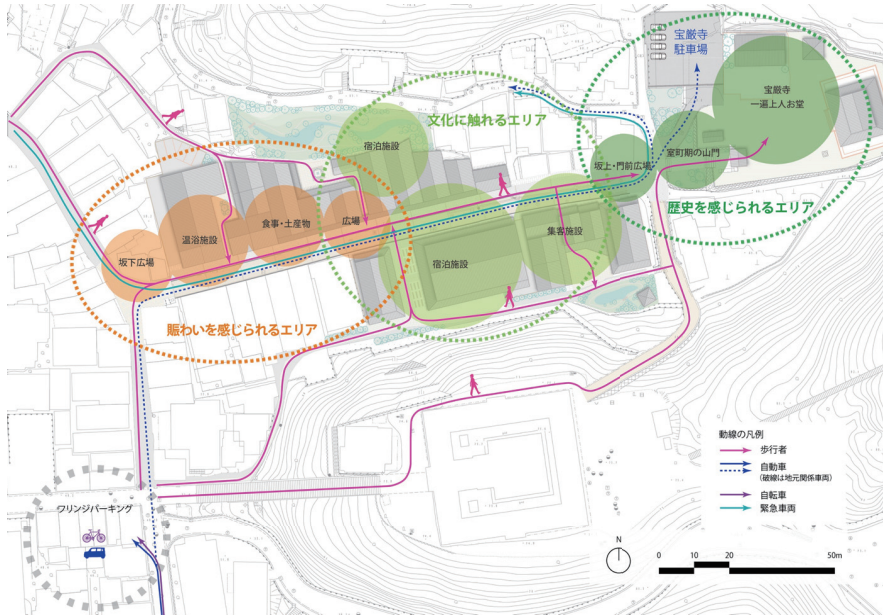
参考文献

・道後温泉活性化計画

2. 道後温泉 _ 2.3 外湯文化の再生



空の散歩道に続く冠山歩道整備
(筆者撮影)



上人坂周辺エリアのゾーニングと動線計画
(出典：道後温泉活性化計画)